

平成二六年度

長岡造形大学

デザイン研究開発

Design Research and Development  
Nagaoka Institute of Design

## 目次

はじめに .....	3
26年度 受託プロジェクト報告 .....	5
マイクロ水力発電設備のプロモーションツール制作業務 .....	6 - 7
多機能ポストデザインへのコンサルタント業務 .....	8
森の循環や地域の林業振興にかかる研究 .....	10 - 15
東洋館ホール建造物現況調査業務 .....	16 - 19
平成 26 年度歴史的建造物詳細調査業務 .....	20 - 23
機那サフラン酒本舗歴史的建造物詳細調査業務 .....	24 - 27
歴史的建造物詳細調査業務 .....	28 - 31
小千谷市歴史的建造物調査業務 .....	32 - 35
デザイン研究開発について .....	37
プロジェクト担当教員 .....	38 - 39
デザイン研究開発の相談について .....	40

## 平成 26 年度の長岡造形大学デザイン研究開発の報告をいたします。

平成 26 年は長岡造形大学が公立大学法人として新たに歩みだした年であります。

デザイン研究開発は、本学の社会連携事業の一環として地域の企業、NPO、行政、およびコミュニティからの要請をうけて実施するものであります。具体的には受託研究開発、受託調査、受託コンサルティング、そしてデザイン制作業務の受託事業として本学でなければ実施が難しい制作などが対象です。

平成 26 年度のデザイン研究開発は私立大学として受託した最後の年である前年度の 10 件より 2 件減少し 8 件でした。

8 件の内容を見ると、平成 25 年度（もしくはそれ以前）からの継続やフォローアップが 7 件であり、新規は「森の循環や地域の林業振興にかかる研究」の 1 件でした。

これまでも地域の資源を活用した開発を支援する方向性の研究開発を行っていた本学としては、この新案件のような研究開発がさらに発展すること期待しております。

また、文化財建造物の調査研究の件数が多いのが本センターの特徴の一つで、今年度は 8 件中 5 件がこれにあたります。これまでもこれらの調査研究は、その後対象建造物が国指定登録有形文化財になり、まちづくりの核施設になるなど、建造物を通じた地域の文化的価値の確認と保存活用に向けた運動・活動が生まれるなどの一定の効果が現れています。

文化財建造物の調査研究は、直近ではまず、その建

造物の保存方法の検討が急務です。その先には、まちづくり活動や、観光開発、地域ブランディングなどへ発展し、デザイン分野が貢献できるポテンシャルを有していると考えられます。

そのような意味で、第 1 走者である地域の建造物調査から、次の走者（デザイン案件）にバトンが手渡されることが、近年の「地域創生」への一助になるとも考えられます。ぜひ関係機関からの次なる研究開発への検討をお願いします。

産業界の活性化が、「地方創生」の焦眉の急であることは論を待ちません。本センターがその目的に貢献するためにも、センターと社会連携の間に生まれた知的財産の有効活用、応用、発展が進むことが理想です。26 年度以降の新体制では、この点を考慮した体制の整備に腐心しております。この文脈上で申し上げますと、今年度の研究開発はこれまで成果としての知的財産は一括クライアントに渡す契約でありましたが、平成 26 年度以降は事業の内容によっては、本学に成果物である知財を集約し、報告書をクライアントに納品する契約であったものも存在します。デザイン研究開発の契約の際には是非このことをご理解いただきたく、よろしく願いいたします。

最後に、委託いただいたクライアントの皆様方には深く感謝いたします。この研究成果を是非とも有意義なものに活用・発展させていただきたいと願っております。

平成 27 年 8 月

長岡造形大学  
地域協創センター長  
渡 辺 誠 介





26 年度

受託プロジェクト報告

受託事業名：

## マイクロ水力発電設備のプロモーションツール制作業務

発注者：株式会社大原鉄工所

受託期間：平成 26 年 5 月 1 日～平成 26 年 7 月 31 日

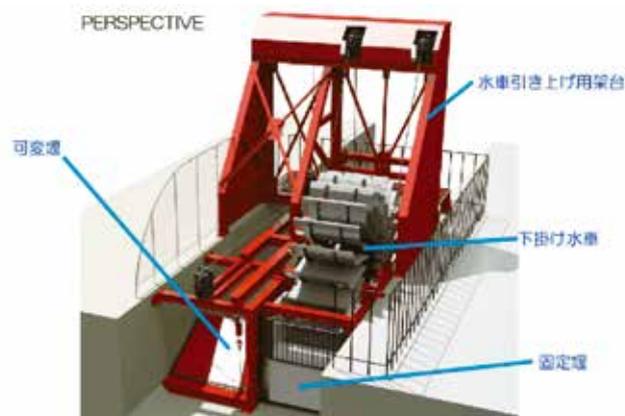
プロジェクト主査：和田裕（学長・教授）

プロジェクトメンバー：金峯洙（視覚デザイン学科 助教）、修士課程 2 年 菊池暁

※所属等はプロジェクト当時のもの

### 1. プロジェクト概要

長岡市が地域産業のエネルギー分野への進出促進を図る目的で助成する「長岡市新エネルギー開発支援補助金」の採択を受け、産学官協働のもと水路を利用した省エネルギー型の小水力発電設備の開発を行うプロジェクトが始まり、平成 25 年度に本学が機構、外装、安全対策、環境対応へのデザイン提案などに関わった。プロジェクトで製作した小水力発電設備の試作が長岡市内の農業用水路に設置され実証実験が始まり、平成 26 年度には、各種展示会等での当該設備のプロモーションに係る PR 映像及び紹介パネルの制作を本学が担った。



CGによる設備の説明（PR映像）

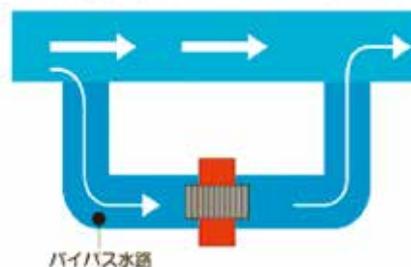
### 2. 小水力発電設備の概要

本プロジェクトで開発をすすめる小水力発電装置は、出力 200KW 以下の小規模発電システムであり、従来の開放水路設置型で水路の満水時やメンテナンスを行う際に水車に流水を遮断するために、バイパス（迂回）水路を設ける必要があったものを、引き上げ架台及び昇降装置を設け、水車を水路上部に引き上げることで、バイパス水路の設置を不要とし、従来と比較し大幅なイニシャル及びランニングコストの低減を実現するものである。

#### 装置の特徴

- (1) 水車の手前に固定堰を設けることで落差を発生させ、落差のない水路でも水車の稼働が可能となる。
- (2) 水車全体を引き上げる機構により、満水時に水車を水路から引き上げ回避することができる。
- (3) 水車に並列に設置する可変堰により、適正水位を保つための水量調整が可能となる。

現状  
満水時等で、流水を停止させるためのバイパス工事が必要→コストがかかる



アニメーションによる装置の特徴の説明（PR映像）

### 3. 実施状況及び成果

約 3 分間の PR 映像では、当該設備の開発趣旨や役割、機構・外装などのデザインを CG により表現し、当該プロジェクトの概要をわかりやすく説明し、プロモーションにつなげた。

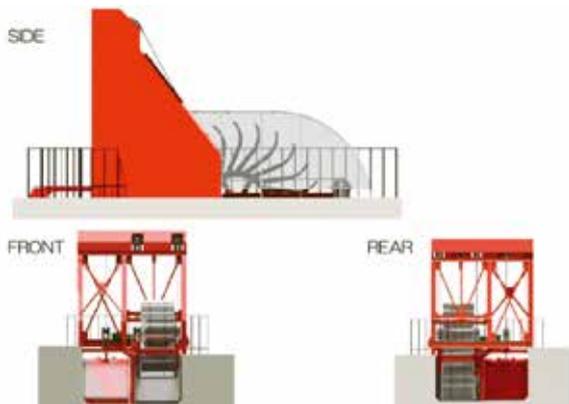
特に装置の特徴である可変堰、水車全体を引き上げる機構についてはアニメーションやナレーションによって強調した。

また、紹介パネルでも、同様にプロジェクトの概要を A1 サイズにまとめ、パネルアップした。

PR 映像、パネルのどちらも環境に配慮した企業であることを伝えるため、グリーンなど柔らかいイメージを持たせるカラーリングを提案した。



展示会でのパネル設置



#### 4. 実証実験について

大原鉄工所を主体とし、長岡市及び本学が協力し進めてきた当プロジェクトにて試作機が完成し、平成 27 年 1 月から約 1 年間の実証実験を開始した。実験開始日には大原鉄工所、長岡市、本学の関係者が立ち会い、設置された装置について説明等が行われた。

試作機を囲むフェンスについても景観デザインの観点から大原鉄工所にアドバイス等を行った。

水量の変化に対し、常に一定の水量を供給可能とする固定堰並びに可変堰を装備



実験開始日の説明会の様子



試作機の実証実験

受託事業名：

## 多機能ポストデザインへのコンサルタント業務

発注者：株式会社下条製作所

受託期間：平成 26 年 7 月 15 日～平成 27 年 3 月 31 日

プロジェクト主査：土田知也（プロダクトデザイン学科 教授）

※所属等はプロジェクト当時のもの

### 1. プロジェクト概要

下条製作所は鉄、ステンレスなど薄板鋼板の板金加工とスポット・TIG 溶接及び、精密小物部品の切削加工を得意とし、アウトドア用品や換気用フード、郵便ポストの製造を行ってきた。

その中でも、郵便ポストは 35 年にわたり、大手メーカーの製造下請けを行ってきたが、今まで培った技術・資産を生かして、独自製品の開発を行うことになった。

本プロジェクトでは 25 年度に多機能ポストのデザイン研究開発業務を行い、26 年度は製品化に向けてのコンサルタント業務を行った。

### 2. 実施状況及び成果

平成 25 年度に基本的なデザイン開発業務として、内外の既存の商品の調査を行うと共に、多くのアイデアの中から単独設置型、壁面設置型の 2 つの提案を行い、主に下条製作所側で製品化に向けての設計作業を行った。

26 年度は 25 年度に積み残した製品化へ向けての細部の詰め作業を下条製作所側が行い、本学は主に色彩の決定と仕上げの調整などについてアドバイスを行った。

### 製品化に向けての試作品





受託事業名：

# 森の循環や地域の林業振興にかかる研究

発注者：中越よつば森林組合

受託期間：平成 26 年 12 月 1 日～平成 27 年 3 月 20 日

プロジェクト主査：金澤孝和（プロダクトデザイン学科 准教授）

プロジェクトメンバー：プロダクトデザイン学科 2 年菊地明、小林智恵子、富澤巧、渡邊祥子、  
渡邊有花子、柳沼茜

※所属等はプロジェクト当時のもの

## 1. プロジェクト概要

本件は、長岡地域の豊富な森林資源の活用を考えるきっかけをつくり、地元木材の利用拡大を図るための調査・研究するもので、中越よつば森林組合が長岡市の地域産業を支援する助成制度であるフロンティアチャレンジ補助金に採択され、本学がデザイン面で協力をおこなったものである。次代を担う若者が地域の現状を知り、考えてもらう意味も含め、学部 2 年生が参加している。

実際の業務に入る前段階の打ち合わせでは、漠然と商品開発をするのではなく、具体的なゴールイメージを明確にしておこうという話から、小学校図書室の木質化を想定してプロジェクトは始まることとなった。

本学が関わった業務内容としては、図書室にかかる地域木材を活用した木質化の検討と、それに関する現状分析と考察、問題提起（キーイシューの提示）の実施、提起された問題にかかる解決方法の提案及び試案の作成である。そこで得られた成果をプレゼンテーションとともに納品をした。

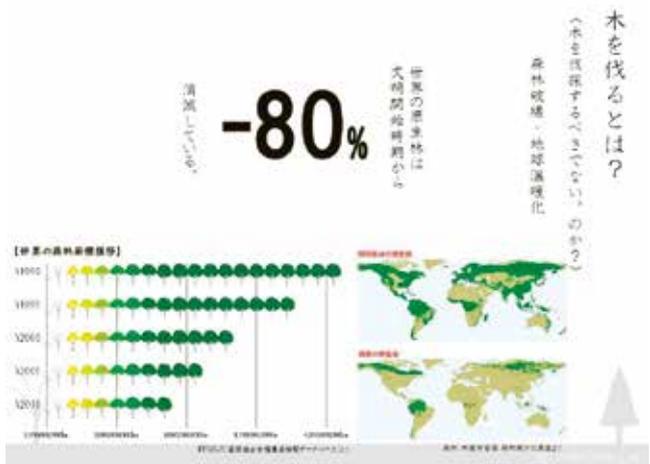
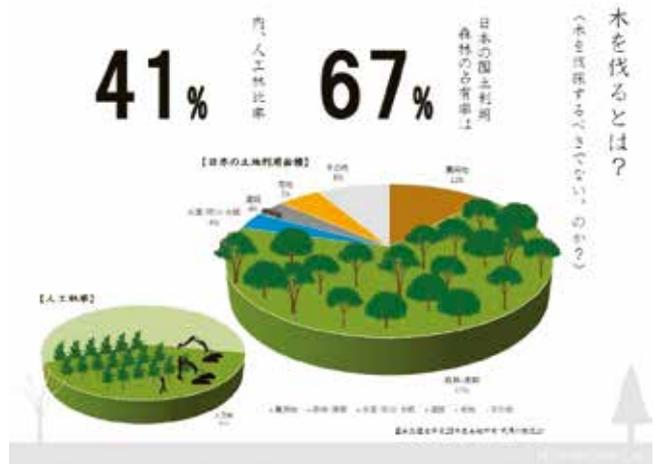
一方で、国土交通省平成 25 年度土地所有・利用概況によると、日本の国土利用の森林占有率は、実に全体の 67% を占めており（内、人工林 41%）長岡市においても総面積の約 50% が森林となっている。木材価格の低迷、国産材需給バランスの崩壊、林業従事者の高齢化などが原因で人工林が荒廃している現状は全国的にも大きな問題として認識されている。また戦後に植えられた木々が用材として適齢期を過ぎてその利用を待っている。豊富な森林資源をどのように活用し、循環していくかが喫緊の課題となっている。しかしこのことは学校教育で環境問題ほど詳しくは取り上げられていない。

森林破壊と森林管理、正しく伝える必要があるのではないだろうか？

## 2. 現状分析と考察、問題提起

### ① 「木を伐採するべきではないのか？」

世界の原生林は文明開化時期から 80% も減少しているといわれており、過度な森林破壊が地球温暖化の原因になっている。この事は以前から学校教育でも環境問題として取り上げられており、木を伐採することはいけないのだという意識が植え付けられている。



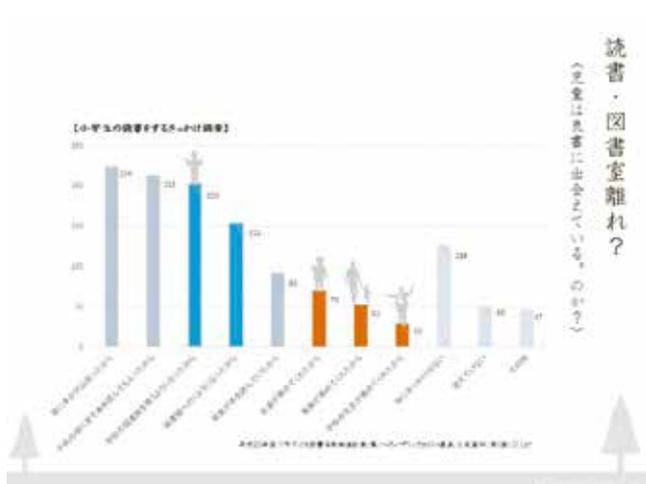
②「児童の読書離れは収まった。のか？」

最近の子供たちは本を読まなくなった、と聞く。しかし、全国学校図書館協議会第59回読書調査によると、小学生の平均読書冊数は近年、約10冊程度と上昇傾向にある。内容を精査してみると各校での一斉読書による成果であることなど、自らの意思で読書活動をしているのかまではわからない。本を手にするきっかけが義務的になっていることが良いことなのか。今一度考える必要があるのではないだろうか？



③「児童は良書に出会えている。のか？」

小学生の読書をするきっかけ調査をした資料（H23年豊川市子ども読書活動推進計画（案）へのパブリックコメント募集 公表資料）によると、〈学校の図書館を使うようになったから〉〈図書館へ行くようになったから〉



という声が上位にきており、図書室が良書にめぐり合う場として機能していることがわかる。

また、〈友人、家族、先生が薦めてくれたから〉という他者からの紹介もきっかけとしてあるが、数的には少ない。図書室に他者から本を紹介してもらう仕組みづくりは今までもなされているが、既存の方法ではない手法が他にもあるのではないだろうか。そのことにより良書にめぐり合う可能性も高まるのではないだろうか？

以上の内容を関係者のコンセンサスをとる意味も含めてプレゼンテーションした。

3. 解決方法の提案および試案

アイデア展開をする前段階の作業として調査をおこなった。先行事例であるイトーキの地域材活用ソリューション「Econifa」の企画担当者にヒアリングをおこなう目的で、東京京橋にあるSYNQAを訪し理解を深めた。

さらには長岡市教育委員会の協力のもと3校（阪之上小学校、六日市小学校、中野俣小学校）に訪問して実際の小学校図書室を調査した。そこでは図書担当の教諭、また休憩時間中の児童から話を聞くことができた。

そのほかにも、南魚沼市図書館（南魚沼木材協会が施工した、町名・集落名が刻印された越後杉のルーバーや根曲がり杉のベンチ等）など、関連する施設を見学した。

そこで得られた情報を整理しながら、前項で取り上げた問題にかかる解決方法を探るべく、アイデア展開とミーティングを重ねた。かなりの量のアイデアがでてきたため、関係者を集めて中間プレゼンテーションを行い、具体的に進める案を選考して、図面化やCG化を進めた。



#### 4. 成果およびまとめ

最終的には大きく7アイデアを成果物としてプレゼンテーションすることとなった。紙面が限られているため、詳しい内容までを説明することはできないが、成果物に関しては画像とともに後述する。

今後の展開として提案した中から数点、具現化する方法を探ることなど、次年度も継続して研究を推進したいというお話をいただいている。

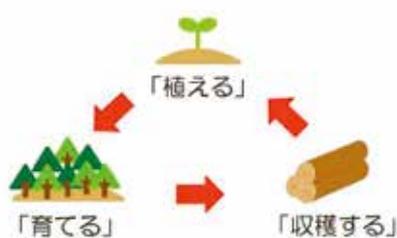
今回関わった学生は、学部2年生ということもあり、未熟な点もあったが、調査～アイデア展開～図面化～試作(CG含む)～プレゼンテーションまで、一連のプロセスを自分達の手で成し遂げたという経験は、今後の彼らにとってかけがえのない経験になったことと確信している。このような機会を与えてくれ、また温かく受け入れてくれたことに感謝したい。



#### ○小学生に知ってほしい「やま」の問題

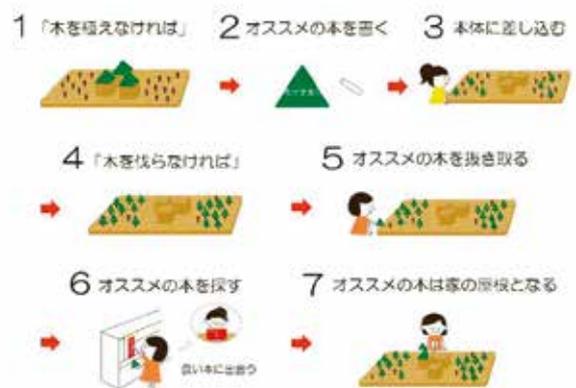
良書に出会うサイクルと森林サイクルを関連付け、感覚的に森林環境の問題を意識してもらう提案。

「人工林のやま」の問題を解決するには



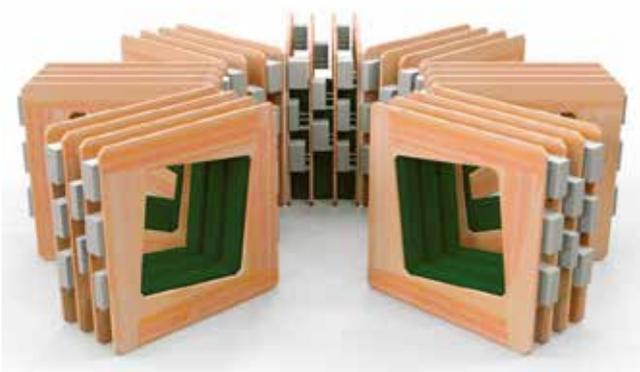
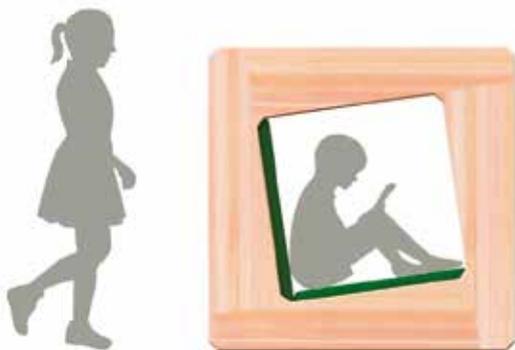
という森林サイクルを。

#### 森林サイクル



○読書トンネル、杉の座布団

図書室で本を読む児童は意外と少ない。書架機能だけではなく、居心地のよい空間を作り出す図書室仕様の提案。



○丸太ラック、角材ラック

書棚の上に置き、おすすめ本紹介するためのラック。  
杉の成長や存在感をストレートに伝えることができる。



○本の屋根

本を紹介するときに伝えたいのはタイトルではなく内容。  
お気に入りのページを伏せて置き、感情を共有する道具。

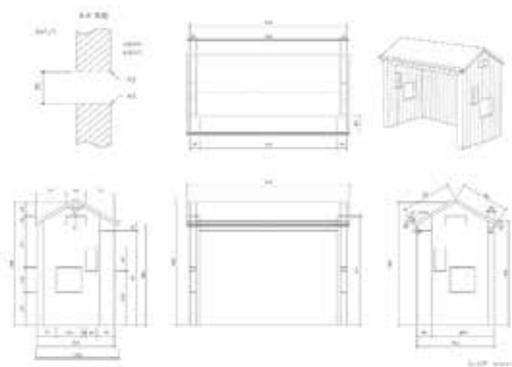


### ○コンテナハウス

長岡市では、中央図書館から各小学校に定期的に本が巡回する「学校配本」というサービスが行われている。

調査で訪問した小学校の教室でも確認でき、児童達は毎回楽しみにしているそうである。しかし無機質な折り畳み式のコンテナに入った本がそのままの状態である教室に置かれている現状であり、改善の余地があると判断して図書室の提案ではないが今回取り上げる。

巡回しているコンテナを横にして、上からかぶせる家の形をした棚である。配本された本は一定期間教室に置かれた後、隣の教室へと巡るそうで、その時に前教室でのお勧め本を屋根に表紙をみせた状態で置くことができる提案である。側面の窓からは、コンテナのラベルがみえるようになっており、そこに児童がイラストを描き、本への興味、愛着を盛り上げていくよう工夫されている。



受託事業名：

## 東洋館ホール建造物現況調査業務

発注者：新潟市

受託期間：平成 26 年 8 月 1 日～平成 26 年 9 月 30 日

プロジェクト主査：平山育男（建築・環境デザイン学科 教授）

プロジェクトメンバー：西澤哉子、梅嶋修

※所属等はプロジェクト当時のもの

### 1. はじめに

東洋館本館は新潟市秋葉区新津本町 3 丁目に位置する歴史的建造物である。

この建物について新潟市秋葉区からの調査の依頼が長岡造形大学にあり、平成 26(2014) 年 8 月に建築調査を実施した。

建築調査においては建物の平面図、断面図、立面図の実測、写真撮影など実施して、建物の平面のあり方とともに、建物を構成する各部の特色を明らかにすることを目的とした。本稿においてはその成果の一部について報告するものである。

### 2. 東洋館の概要

東洋館は新潟商業銀行の新津支店として建てられたものである。

新潟商業銀行は明治 30(1897) 年に開業した銀行である。新津に支店が設けられた時期はこれまで明らかとはされていなかった。但し、大蔵省銀行局による『銀行総覧』を通覧すると、新潟商業銀行では大正 4(1915) 年の記載から本店に加え支店の存在を確認できることが判明した。そのため、新潟商業銀行の新津支店の開業は大正 4(1915) 年頃と判断することができる。

以後、新潟商業銀行は大正 7(1918) 年に商号を新潟銀行と改めており、昭和時代初期までには新潟県内の五泉吉田銀行、新潟商業銀行、葛塚銀行、三条商業銀行と合併をしている。

最終的には、第二次世界大戦における国の金融統制による一県一行主義の方針に基づいて、新潟銀行は第四銀行と昭和 18(1943) 年 3 月に合併を行った。このため新津支店は第四銀行新津三ノ丁支店と改められたものの、第四銀行新津支店が既に近隣にあったため、早くも同年 7 月 12 日に新津三ノ丁支店の営業は廃止された。業務は既存の第四銀行新津支店に継承されることとなり、建物は登記簿の記載によると同年 12 月になって東洋館印刷所へ譲渡されている。

この後、本館の建物は東洋館印刷所社の事務所、新聞販売所事務所などとして用いられて来たが、平成 8(1996) 年になって当時の新津市に寄贈されることとなった。以後、建物は東洋館印刷所社に因み、「東洋館」の呼称によって、市民の憩いの場として、現在は各種イベントなどにも利用されている。

### 3. 東洋館本館の概要

#### ・配置と形式、規模

東洋館は新潟市秋葉区の旧新津市の中心市街地に位置している。

敷地は JR 新津駅東口からの駅前通りを南側に折れ、南北に町並みを貫く本町通りの東側になる。敷地は通りに西面することとなるが、間口 8.5 m 程、奥行 40 m 程と極めて細長いものである。この敷地の通りに面して東洋館本館の建物があり、背面に回り込んで新聞販売店の作業場が配されている。

建物は RC 造 2 階建、陸屋根の形式で手摺壁を廻して屋上を設ける。

規模は本町通りに面する南北方向が 10 m 程、敷地奥行となる東西方向は 20 m 程となる。

#### ・平面

1 階へは正面中央に配されるドーリア式円柱に挟まれたペディメントを冠する入口から入ることとなる。

風除室を介して広がる 1 階のホール（旧営業室）は 2 階までの吹き抜けとなっており、現状ではカウンターが撤去されている。この東側壁の中央付近に階段室及び便所へつながるドアがあり、北側には大倉金庫の製造に関わる金庫室が設けられている。階段室は中央に通路を設け、この突き当たりに設けた扉から建物背面へ抜けることができるため、外部には鉄扉及びシャッターが装置される。金庫室の西側正面扉は鉄扉、鉄格子戸からなるもので、鉄扉のダイヤルは「イロハ」の文字が刻まれる。なお、金庫室では南面の階段室側にも小振りの窓が設けられ、鉄扉が配されている。

2 階は階段室を挟んで 2 室があり、いずれもホール側と背面の東側に窓を開くが、現状では物置としての使用に留まる。

屋上へは階段を通じて登り、塔屋から出ることとなる。なお、現状で屋上床面は防水のため片流れの金属板葺となっている。

なお、煙突が建物北の正面側に寄って設けられているが、現状ではこの頂部に蓋が被せられており、使用はしていない。

#### ・平面計画

平面計画では、旧営業室側東西方向の柱間は 3,636mm(2 間) を基準とするようで、金庫室の奥行は 3,333mm と想定される。総間口は 8,484mm で金庫室を 3,333mm、階

段室を2,727mm、便所が2,424mmとする。1階の柱は660mm角程、2階背面の柱は570mm角程とするものであった。

#### 4. 東洋館本館の建築年代及び復原考察

##### ・建築年代

この建物の建築年代は昭和5(1930)年と建設省六日町庁舎35周年記念行事実行委員会編さんによる『新潟県の近代建築』(平成6・1994年)などにも伝承されているが、その1次資料は建物からは見出されなかった。また、合併後の第四銀行企画部にも建築年代について照会を行ったが、関連資料は保管されていないことが明らかとなった。

なお、現存する登記簿の記載は東洋館への売却以後のものに留まり、昭和18(1943)年以前の情報は記されていない。

但し、内外の仕様を見る限り、建物は昭和時代初期の建築とみてもよいものと考えられる。

##### ・復原考察

東洋館本館の外観はガラス窓が2階南東の部屋を除きサッシ窓へ改造されているが、西側正面立面に設けられた2本の円柱柱式など、全体的な意匠は当初の形態をよく伝えている。

なお、当初設けられていた窓の鉄扉は背面出入口のものを除いては大半が撤去を受けているものの、鉄扉の建物側における留具が数箇所、外壁に残されていることを確認できた。

1階営業室は、当初金庫室を囲むようL字型にカウンターの配されていたことが内部壁面に残る雑巾摺の高さから復原することができる。つまり銀行時代は風除室側に客溜まりを設け、南側の壁に沿ってカウンターが延びて通路が設けられ、この突き当たりの扉を進むと、現状の便所が当初は客を迎え入れる応接室であったと考えられるのである。

2階の2室は南側が洋室としての仕様であるが、北側は長押状の部材が内法高さに巡り、ドア框の高さに丈の低い畳寄とも考えられる材が配されていた。そしてこの部屋は格天井の仕様を持つことから、当初は和室の可能性が高い。県内における銀行建築の類例では、第四銀行住吉町支店でも、2階奥に和室がやはり設けられており、日常的には行員の休憩室として用いられたとされるため、同様の利用が想起される。

ところで本館である東洋館の東側背面には、木造で切妻造となる建物の接続していたことが本館建物外部に残る痕跡等から明らかである。一方、登記簿の記載によれば、昭和18(1943)年の東洋館への売却に際してはRC造の本館に加えて、附属建物として以下の建物のあったことが判明する。

- 1) 木造瓦葺平屋建居宅宅棟 建坪拾九坪参合参勺
- 2) 木造瓦葺平屋建居宅宅棟 納屋建坪式坪式合五勺
- 3) 木造瓦葺平屋建居宅宅棟 建坪拾式坪五合

この3棟が本館に対してどのように配されたのかは明らかでないが、本館に取り付いた建物は規模から考えて1)もしくは3)のものであるといえる。つまり、いずれにせよ本館には当初木造平屋建で瓦葺の建物を取り付いていたと判断することができるのである。

この時代、銀行建築や役所の建築では、RC造の本館に対して、木造の附属屋が取り付け、ここに役務方の機能が置かれる事例を多数見ることができ、同様の使われ方をこの木造建物は担ったものと考えられる。

なお、この附属建物は3棟とも昭和44(1969)年になって撤去を受けたことが登記簿に記載されている。そして現在では本館背面となる場所には新聞配達所の建物が新たに建築されており、本館建物の東側背面に直接接続している。

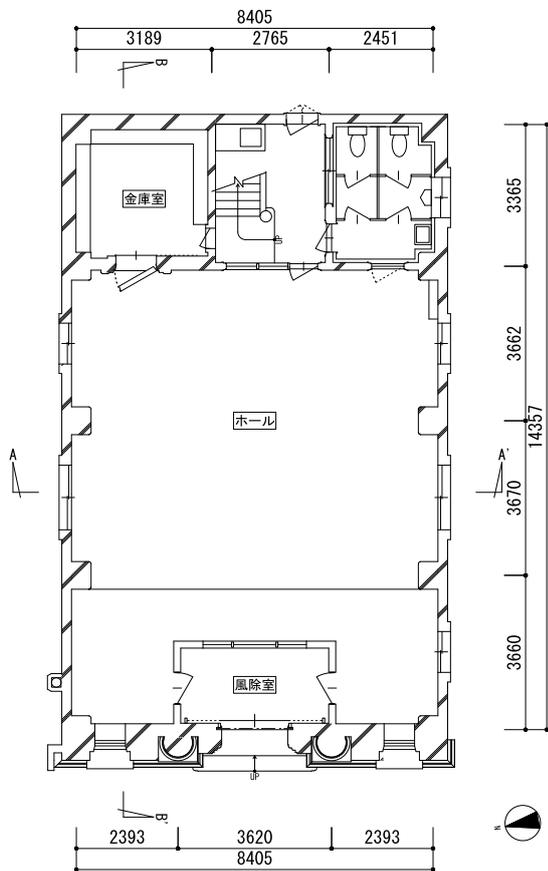
#### 5. さいごに

東洋館本館の調査から明らかとなるのは以下の点である。

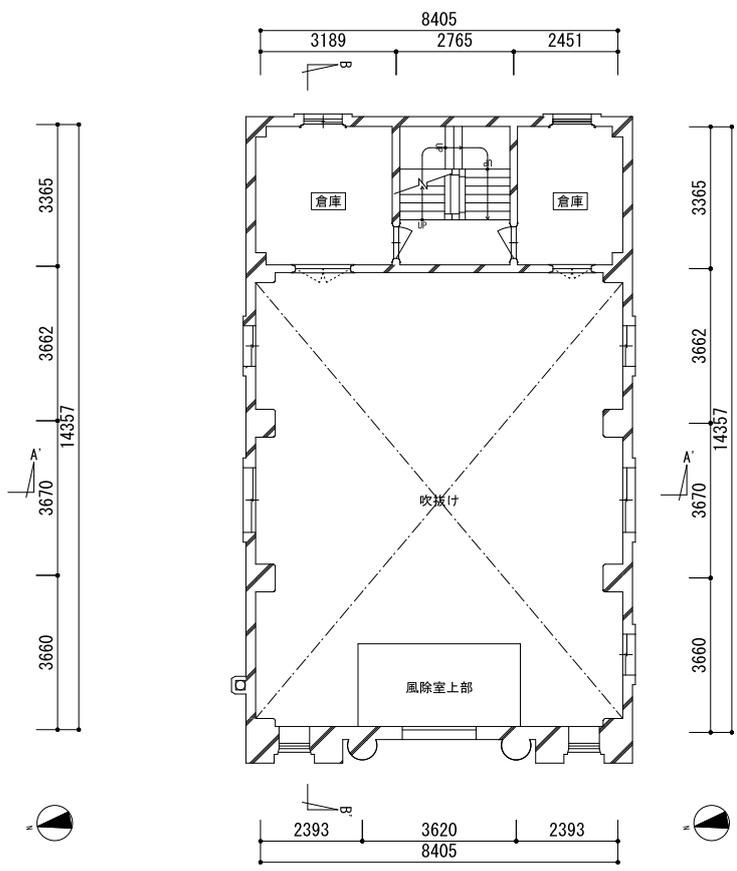
- 1) 東洋館本館の建築年代は昭和5(1930)年と伝承されるが、建物の仕様からみて昭和時代初期の建築と見ることができる。
- 2) 東洋館本館旧営業室に設けられていたカウンターは金庫室を囲むようにL字型の平面に復原することができる。
- 3) 東洋館本館2階北側の部屋は、当初、和室として復原することもできる。
- 4) 東洋館本館には当初、木造瓦葺の付属屋が背面に取り付いていたが、これは昭和44(1969)年になって撤去を受けた。
- 5) 旧新潟商業銀行の新津支店は、大正4(1915)年頃に開設されたものと判断できる。



新潟市秋葉区 東洋館本館全景 西より



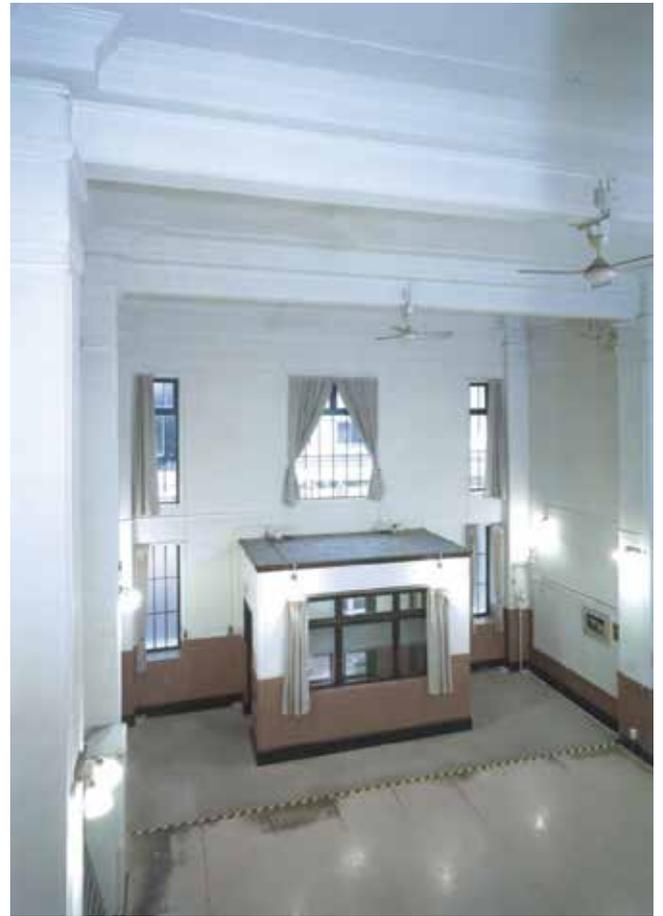
東洋館本館 1階平面図



東洋館本館 2階平面図



東洋館本館旧営業室 西より



東洋館本館旧営業室 東より



東洋館本館階段室 南より



東洋館本館背面鉄扉 東より



東洋館本館 正面立面図



東洋館本館 断面図

受託事業名：

## 平成 26 年度歴史的建造物詳細調査業務

発注者：三条市

受託期間：平成 26 年 8 月 6 日～平成 27 年 2 月 27 日

プロジェクト主査：平山育男（建築・環境デザイン学科 教授）

プロジェクトメンバー：西澤哉子

※所属等はプロジェクト当時のもの

### 1. はじめに

三条市からの依頼で、平成 26(2014) 年度においては、三条市中心市街地（一ノ木戸地区）における歴史的建造物調査と歴史的建造物群の詳細調査として、三条市八幡町に所在する渡辺家住宅土蔵の建築調査を実施した。本稿では調査から明らかとなった建物の来歴、建築年代などについて報告を行う。

### 2. 三条市中心市街地（一ノ木戸地区）歴史的建造物調査

この調査は、当該地区における建物に対して目視による悉皆的な調査を行い、建築の形式などを記録に留めることを目的としたものである。

調査は平成 26(2014) 年 8 月に実施し、調査範囲は三条市中心市街地の一ノ木戸地区の内、横町 1 丁目、明神町、仲之町、林町 1 丁目、一ノ門 1 丁目、田島 1 丁目の一部とした。

調査の方法は、公道より目視可能な範囲で調査項目を確認して調査票を記入し、外観の写真撮影を行った。なお、調査項目は建築年代、年代根拠、建築構造、階数、屋根形式、屋根葺材、軒形式、軒高、用途などである。

調査の結果、当該地域においては 472 件を確認し、調査票の作成及び写真撮影を実施した。

なお、この調査により、当該地域には昭和戦前期に遡ると考えられる物件が 186 件確認された。これは全調査数 472 件に対して 39% となり、比較的高い数字となる。

### 3. 渡辺家住宅土蔵

#### ・渡辺家の概要

渡辺家住宅は三条市八幡町の一角に位置するものである。具体的な場所は、三条市中心市街地を東西に貫く大通りから北に折れる八幡小路が大門通りと交叉する北東の角地で、現在の地名では三条市八幡町となる。

渡辺家の敷地は八幡小路に西面し、間口 2 間半程、奥行き 17 間程の細長い形状で、敷地南面が大門通りに面し、東側背面は徳誓寺に隣接することとなる。

渡辺家は文化年間に初代が没しており、出身は不明とする。明治時代後期に没した 4 代前の源造（蔵）が家産を増やしたとされ、蔵内部の家財も多くがこの時代のものであった。なお、当家は近年まで、この地においてパン屋を営んでいたという。

#### ・渡辺家住宅土蔵について

##### 配置と形式、規模

渡辺家は角地に西面して旧の店舗を配する。間口 3 間、奥行 6 間程の規模となる。そしてこの背面に回り込んで住宅居室があり、この背後に土蔵が配される。なお、敷地は北側隣家の背面に回り込み、ここに住宅居室が更に配される構成となる。

##### 概要

土蔵は切妻妻入りの形式で西面する。建物は 2 階建て、後述する覆屋の屋根が塗り込められた土蔵の屋根上に直接置かれる置屋根形式の金属板葺となる。

##### 平面

土蔵自体の規模は間口となる梁行が 11.35 尺、奥行となる桁行が 18.11 尺であり、この周囲を覆屋が囲う。覆屋は切妻妻入り形式で間口 12 尺程、奥行が 30 尺程で、正面側 10 尺程が蔵前となる。

土蔵 1 階は西面中央やや南側にずれて扉が設けられている。正面の扉は外側から土戸の開き戸、塗り込めの引き戸、いずれも引き戸形式となる板戸、網戸と四重の構成となっている。室内は 1 室であり、背面側に寄って奥行 3 尺程の棚が設けられている。1 階に窓は設けられず、2 階床面に配された格子を通して 2 階からの採光となる。なお、床下には 2 個所の床下収納が設けられ、床面は格子としている。2 階へは入口の北側に配されている梯子段によって上る。

土蔵 2 階も 1 室で、東側中央に窓を設け、ここには外側から土戸開き戸、鉄格子、一本引の溝に網戸、ガラス戸、土戸の引き戸を立てる。床面の中央部には窓のある東側に寄って既述した格子が設けられ、1 階への採光に用いられている。

なお、土蔵の柱間は桁行では 2.00 尺程を基本とするものであるが、妻正面側は 7 間の内、北側の 2 間は 2.00 尺程、残りの 5 間は 1.35 ～ 1.50 尺の柱間とするものとなっている。

覆屋は正面側を蔵前とする。土蔵の両脇は 0.6 尺程の巾しかなく背面は土蔵 2 階窓部分が開放となる。西側には外部に通じる引き違いガラス戸があり、北面西側には住居部分からの廊下が接続するガラス戸の引き戸を設けられている。

##### 構造

土蔵は、駒石上に土台を配し、基本的には通柱を立てる

ものである。なお、土台上1尺程の高さに中敷居状の材を配し、下部は柱外側を板張りとして、土壁はこの上部から始めるものである。柱は0.43尺角が基本で、正面の扉を受ける両脇の柱2本が0.50尺角となる。柱は1階で貫3通し、2階は2通しで固められる。1階床はコンクリート製の土間に転ばして大引、根太を配するものである。2階床は梁行に1間間隔で2階床梁、桁行に2通しで2階根太を配し、その上へ更に桁行で板敷とする。小屋組は両妻面は妻梁上に桁を掛ける折置組で、中央付近に配する小屋梁は桁を2重にして京呂組で受ける形式となる。妻面は2重の小屋組で、これらと小屋梁が約1.00尺角の地棟を受けることとなる。2階天井は板軒で垂木を配さない。外部は腰壁を3.3尺の高さまで廻し、屋根は側面が2重、正面は3重の鉢巻きを配するが、開口部廻りのみを漆喰仕上げとする。

覆屋は布基礎上に土台を配し、角柱を立て3通しの貫で固める。そして柱が直接、土蔵屋根上で組まれる合掌尻を受け、桁を受ける構造とする。

## ・建築年代と復原考察

### 建築年代

この建物から建築年代を示す1次資料は見出されなかった。

但し、1階奥の棚、2階窓枠、2階小屋組と天井板の間などに和釘が確認されたことから、この土蔵の建築は明治時代中期以前、更に明治時代中期における三条の大火を潜り抜けたとするならば、江戸時代末の建築と考えるのが妥当であろう。

ところで、三条市の中心市街地における明治時代初期頃の様子を示すとされる『明治初年三条町地図』によれば、当該の敷地における居住者は

野水吾八

と記されている。そのため、この土蔵は現在、居住する渡辺家による建築ではなく、この『明治初年三条町地図』に示される野水家による建築の可能性が高いものと判断することができる。

ところでこの土蔵には

①《上》木膳椀廿人前

五人前入

②《向かって右下》

安政二卯年十月

笠原佐次左エ門

③《向かって左下》

三条町字八幡小路

渡辺源造具

とする銘を持つ木膳入が収納されていた。

内容だけであると、既に渡辺家が安政2(1855)年の段階で八幡小路に在住していたとすることもできるものの、筆跡をみると①②は同筆であるものの、③のみ別筆と判断することができた。そのため渡辺家の八幡小路における居住はやはり明治元(1868)よりも下り、この土蔵の建築もそれ以前の居住者である野水によるものと判断できそうである。恐らく、渡辺家が当地に移り住んだのは『明治初年三条町地図』以後、明治時代中期頃における源蔵の代とするのが妥当であろう。

### ・復原考察

土蔵は特段の改変を見ることはできなかった。

1階奥に設けられた棚は和釘の仕事であり、当初以来のものとすることができよう。

なお、2階の窓にはガラス戸も立てられていたものの、この建具装置は中古のものであり、当初は外側から土戸の開き戸、鉄格子、土戸と網戸の引き戸と考えるのが妥当であろう。

また、土台上1尺程の高さに土壁を設けない構法は当初のものとして判断される。このような事例は当該地域において複数確認されているが、背景として当地で多発する床下浸水程度の水害時における土壁被害の防御と考えることもできよう。

### ・さいごに

三条市八幡町に位置する渡辺家住宅土蔵における調査から明らかとなるのは以下の点である。

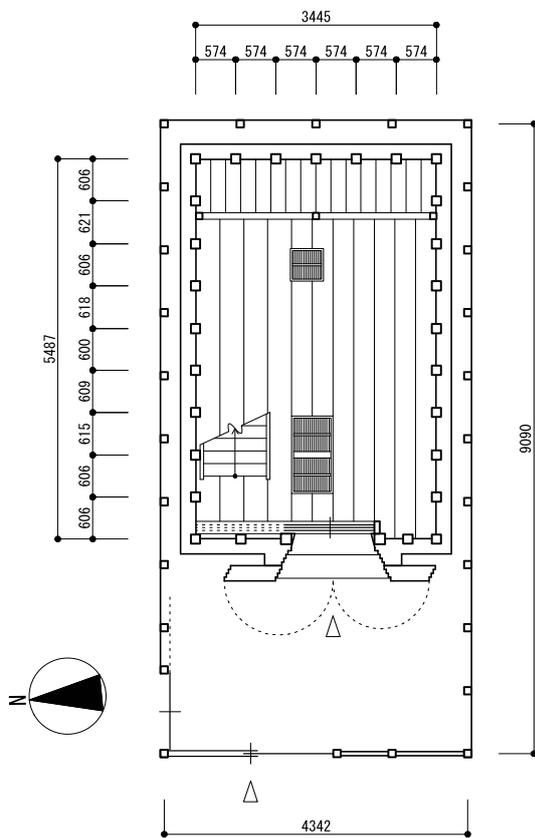
渡辺家土蔵は和釘の仕事であり、明治時代中期における三条の大火を潜り抜けたとすれば江戸時代末期頃の建築と判断される。

そしてこの土蔵の建築は明治元(1868)年における当該地の居住者として確認される野水家によるものと考えられる。

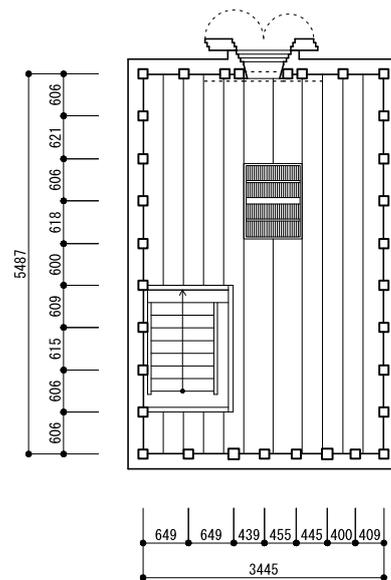
なお、この土蔵においては、土台上1尺程に土壁を設けない構成であったが、これは浸水時における土壁被害の防御と見ることもできた。この構成は三条市中心市街地では近代以前に遡る土蔵において、これまでも度々散見された形式であり、当該地域における特色的なものとする事ができよう。



三条市元町 渡辺家住宅全景 南西より



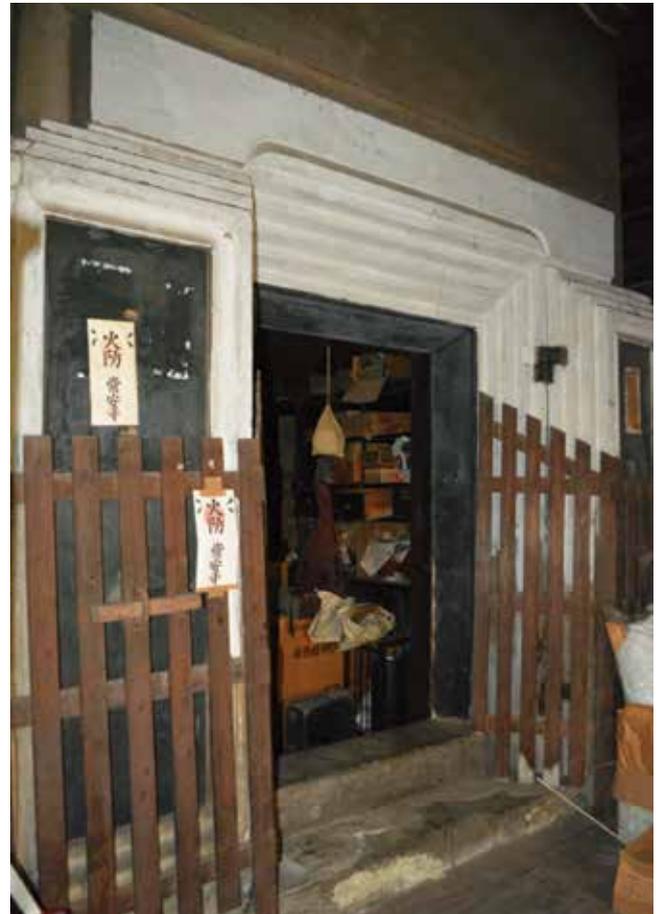
渡辺家住宅土蔵 1階平面図



渡辺家住宅土蔵 2階平面図



三條市元町 渡辺家住宅土蔵 南東より



三條市元町 渡辺家住宅土蔵蔵前 北西より



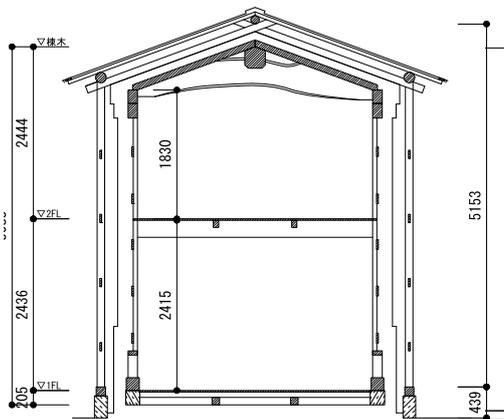
三條市元町 渡辺家住宅土蔵2階 北東より



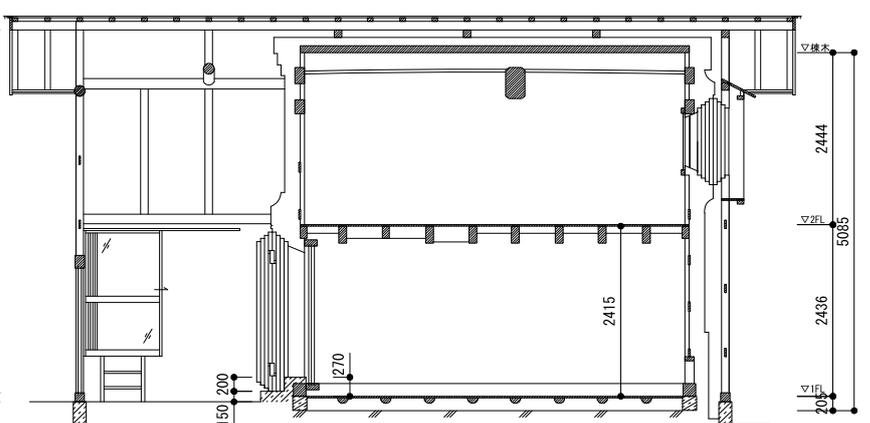
三條市元町 渡辺家住宅土蔵1階 北東より



三條市元町 渡辺家住宅土蔵1階土台回り 南より



渡辺家住宅土蔵 梁行断面図



渡辺家住宅土蔵 桁行面図

受託事業名：

## 機那サフラン酒本舗歴史的建造物詳細調査業務

発注者：NPO 法人醸造の町摂田屋町おこしの会

受託期間：平成 26 年 10 月 1 日～平成 27 年 3 月 31 日

プロジェクト主査：平山育男（建築・環境デザイン学科 教授）

プロジェクトメンバー：西澤哉子

※所属等はプロジェクト当時のもの

### 1. はじめに

長岡市摂田屋を中心に活動する NPO 法人醸造の町摂田屋町おこしの会から機那サフラン酒本舗における歴史的建造物の調査依頼に基づいて、平成 25(2013) 年度に引き続き、本年度も同本舗に現存する主屋、衣装蔵、離れ座敷をはじめとする建物の調査を実施した。ここでは、調査から明らかとなった建物の来歴、建築年代などに報告を行うものである。

### 2. 機那サフラン酒造本舗の概要

機那サフラン酒造本舗では吉澤仁太郎が明治時代中期頃から薬種の製造及び販売を行っていた。

仁太郎は文久 3(1863) 年 6 月 2 日、古志郡定明村の吉澤家次男として生誕した。生家は農家であったが機那サフラン酒の製造を明治 17(1884) 年から始め、明治 27(1894) 年には摂田屋の地に出たとされる。仁太郎は明治 44(1911) 年には大看板、大正 15(1926) 年に鏝絵蔵、即ち事務棟を建築し、昨年度の調査により主屋は建築文書から大正 2(1913) 年の増築と推定され、離れ座敷は発見された棟札から昭和 6(1931) 年の建築と判断された。なお、衣装蔵は普請文書から大正 5(1916) 年とする建築年が推定されるに至った。なお、仁太郎の没年は昭和 16(1941) 年 5 月 12 日である。

### 3. 機那サフラン酒造本舗建物の概要

#### ・敷地

本舗の敷地は摂田屋の地を南北に縦断する県道 370 号線に東面して、広さは間口 100m、奥行 50m 程の規模となる。県道に面した敷地境には高さ 1m 程の石垣が築かれており、石垣を区切って中程の北側と南側に入口が設けられる。北側の入口正面に主屋と事務所棟として用いられた鏝絵蔵を配し、その上手に衣装蔵、背面に離れ座敷が立ち、衣装蔵から離れ座敷前にかけて数々の灯籠を備えた庭園が広がっている。なおこの他、敷地内には調整、包装、充填などを行う作業棟、倉庫蔵が 2 棟と車庫などが配されている。

#### ・主屋

主屋は東面する建物で、木造一部 2 階建、入母屋造棧瓦葺妻入である。本屋の規模は正面梁行 8 間、桁行 9 間であるが、上屋の正面に正面梁行 4 間、桁行 2 間で 2 階建棧瓦葺切妻造妻入の入口部建物が北側に寄って取り付い

ている。また、正面東面、南側面に 1 間幅の下屋が取り付き、縁及土庇となる。加えて、主屋正面上手には角屋が 3 間延び、衣装蔵が取り付く。離れ座敷は主屋南西角に廊下を介して配され、主屋下手の表側に事務棟、裏側に作業棟が接続する。

#### ・衣装蔵

衣装蔵は北面する建物で、切妻造棧瓦葺平入、2 階建の形式となる。規模は桁行 4 間半、梁行 3 間である。

#### ・離れ座敷

離れ座敷は東面し、入母屋造棧瓦葺平入の形式を採り、桁行 9 間半、梁行 5 間、2 階建とする。

### 4. 機那サフラン酒造本舗建物の建築年代

#### ・主屋

昨年度の調査により見出された建築文書類の考察から、主屋は既存の入口部背面部分となる本屋が増築と判断した。この本屋部については、資料類から建明治 45(1912) 年から見積があり、大正 2(1913) 年に上棟あったものと判断したが、主屋の建物自体からは建築年代を示す 1 次資料は未発見であった。

一方、今年度の調査では主屋屋根瓦からは数々の刻銘などを見出すことができた。先ず当初と考えられる軒瓦ではすべての部材の正面の向かって右側に

塩 1

の刻銘が確認された。また、主屋入口部分の鬼瓦から鱗部分にかけて、南側の肩には

加茂町

反対側の向かって北側の肩には

陣ヶ嶺 竹 1 塩 1

の刻銘が確認された。

さて、増築部分となる主屋北面には当初から気抜が設けられたが、この東側となる鬼瓦台の南背面には

大正二年

第八月吉

吉澤 

とする箋書による刻銘が確認された。なお、この刻銘は地上から確認することはできない場所である。

加えて、主屋棟西側背面鬼瓦北側の東背面には

モカ

塩 1

竹

とする窠書の刻銘が見出された。入口部の刻銘を参考とすれば、1行目の2文字は向かって右から読み、「加茂」を示すものであろう。なお、この刻銘も地上からは目視のかわかない場所であった。

以上、主屋の増築部分からは大正2(1913)年の刻銘などが発見されたことから、主屋の増築工事は昨年度に見出された資料類から判断した大正2(1913)年で間違いないことが明らかとなった。

また、主屋入口部は旧主屋を残したものと判断したが、この部分も主屋の増築部分と同種の銘を持つことから、大正2(1913)年の増築工事に伴い屋根の葺替が行われたと判断することができる。なお、増築工事においては当初、板葺石置きによる見積がなされていたが、後に瓦葺に改められたことを考慮すると、当初と考えられるこの入口部分は、増築前、板葺石置の形式であったものと判断できよう。

ところで増築工事の日程では、上棟が大正2(1913)年5月末頃、左官工事が6月6日以後、瓦工事は10月11日以後となるため、厳密に言えば瓦銘にある大正2(1913)年8月とは瓦の制作を行った日付と見ることができる。

#### ・事務所蔵

従来、この事務所蔵の建築年代については、藤森照信が『銀花』64号に

上棟の時の御幣があるにもかかわらず、これに年紀が入っていないので、困ってしまい、もしやと思って、屋根に上り、鬼瓦を調べると

「大正十五年五月五日 塩」謹製」

と銘が切っている。

として、鬼瓦の銘を報告していた。ただし、これがいずれの鬼瓦のどの部分にあるのかの報告はなされていなかった。

そこで本年の調査では実際、事務所棟の屋根に上がって、鬼瓦を観察すると、正面となる東面、南側の鬼瓦及び鱗の台となる瓦の西背面、即ちこれも地上から目視のできない場所に上述の

大正十五年五月五日 塩」謹製

とする銘を確認することができた。

## 5. 塩野竹蔵と陣ヶ峰瓦

### ・塩野竹蔵について

主屋における大正2(1913)年の増築工事を実施したのは

塩野竹蔵と判明している。即ち、瓦の見られた“塩」は苗字、“竹」は名前に因む印と見ることができる。塩野はこの後、大正5(1916)年における衣装蔵の工事においても瓦を納めている。

### ・陣ヶ峰瓦

現在、新潟県を代表する瓦の産地は安田となる。ところで大正時代初期における陣ヶ峰と安田における瓦の生産量を見ると、陣ヶ峰では大正2(1913)年の段階において業者数8戸とされ、生産量は42,800坪、生産額66,300円となる。一方、安田は大正5(1916)年の段階であるが業者数は22戸、生産量13,000坪、生産額23,400円とされる(ここで1坪とは6尺立方とする)。即ち、この段階において生産量では陣ヶ峰が安田の3.3倍、生産額は2.8倍の規模であったことが判明する。

一方、大正時代の長岡における両者の値段を見ると、陣ヶ峰瓦は葺上1坪当たり8～10円であったのに対し、安田瓦は1坪当たり9～11円とされている。瓦の移送を鉄道に頼った当時、長岡の地においては輸送距離の長い安田瓦は陣ヶ峰に比較して不利であることは否めないものの、このような値段の差もサフラン酒造本舗の建築工事において陣ヶ峰瓦が採用された要因として考えることができることが判明した。

## 6. さいごに

以上、平成26(2014)年度における機那サフラン酒造本舗の調査においては、建物の建築年代の確定や瓦の産地の特定を行うことができたが、成果をまとめると以下のようなになる。

主屋の気抜鬼瓦には“竹」“塩」ほか大正2(1913)年の刻銘があり、同年の増築を確認することができた。そして、主屋の入口部屋根の鬼瓦にも“竹」“塩」の銘が確認できたことから、大正2(1913)年の主屋増築工事に伴って板葺石置の形式から瓦葺に屋根は全体が改められものと考えられる。

また、事務所蔵における大正15(1926)年の瓦銘は、正面南側の鬼瓦台西面の、地上からは目視の難しい位置に刻まれることが確認された。

このように大正2(1913)年の増築工事において、瓦を納めたのは陣ヶ峰の塩野竹蔵であったが、大正時代初期、陣ヶ峰は安田に較べ約3倍の生産高があり、長岡においては陣ヶ峰瓦の方が安田瓦より安価であった。



主屋入口部 鬼側の銘



主屋入口部 鬼側の銘



事務所蔵 瓦銘の位置



事務所蔵 瓦銘



事務所蔵 瓦銘



主屋 瓦銘の場所



主屋 降棟鬼瓦銘 A



主屋 気抜鬼瓦台銘 B



主屋 大棟瓦銘



主屋 気抜鬼瓦台銘

受託事業名：

## 歴史的建造物詳細調査業務

発注者：長岡市

受託期間：平成 26 年 10 月 9 日～平成 27 年 3 月 13 日

プロジェクト主査：平山育男（建築・環境デザイン学科 教授）

プロジェクトメンバー：西澤哉子

※所属等はプロジェクト当時のもの

### 1. はじめに

平成 26(2014) 年度には、長岡市からの依頼で長岡市釜ヶ島の長岡市越路河川公園に移設されている旧越路橋、長岡市岩田の渋海川に架橋される岩田橋、同じく長岡市不動沢の不動沢橋、小国町横沢の十二社本殿及び拝殿、小国町小国沢の本堂、山門、経蔵、観音堂についての建築調査を実施した。本稿では以上の調査から明らかとなった建物の来歴、建築年代などの報告を行う。

### 2. 長岡市釜ヶ島 旧越路橋

北越鉄道は直江津から柏崎、長岡を經由し沼垂、新津から分岐して新発田を目指す計画線で、信濃川における渡川は浦におけるものと決定され、鉄道橋として信濃川橋梁の建設が決まった。橋梁の建設は難航し、同線の開通は明治 31(1898) 年 12 月 27 日であった。ところで信濃川橋梁は昭和 15(1940) 年に老朽化のため架替工事が行われた。工事は第 2 次世界大戦のため昭和 19(1944) 年から昭和 25(1950) 年まで中断し、昭和 27(1952) 年に竣工した。その後、旧信濃川橋梁は道路橋へ転用されることとなり、昭和 34(1959) 年 11 月に開通した。これが初代越路橋である。当初、橋は有料であったが昭和 42(1967) 年以後無料開放が実現した。更に、平成 3(1991) 年に越路橋の架替が始まり、平成 10(1998) 年 10 月、第 2 代越路橋が上流側に開通し現在に至る。つまり、旧越路橋は明治 31(1898) 年建設の信濃川橋梁を拡幅させた初代越路橋で、この一部を第 2 代越路橋開通後、隣接する信濃川西岸に位置する越路河川公園の一角へ平成 14(2002) 年 9 月になって移設したものである。

旧越路橋は 6 連のトラス橋であった信濃川橋梁の内、東から 2 連目の一部部材を用い、改造したものである。規模は長さが柱間 20ft7in、即ち 6.2738m を 5 間つなぎ、31.369m とする。幅は柱間を 7.00m とする。なお、橋の東岸側には当初に遡るハンディサイド社の刻銘板、1897 年と刻まれた信濃川橋梁の橋名板、初代「越路橋」の橋名板、昭和 34(1959) 年における初代越路橋開通記念碑などが案内板とともに配される。

### 3. 長岡市岩田 岩田橋

旧岩田村において、近世期、渋海川の渡川は渡船に頼っていたが、明治時代以後、この付近では飯塚橋の架橋が既に行われていた。初代岩田橋の架橋は大正 14(1925) 年

9 月にあり、これは長さ 30 間（約 54.5 m）に及ぶ鉄製の吊橋で、公費は 4,000 円と記録される。但しこの橋は、渋海川の改修工事により廃止され、昭和 24(1949) 年 8 月に、第 2 代岩田橋が竣工した。規模は幅員 2.2 m、長さ 40 間（約 72.7 m）であった。そして第 3 代の岩田橋は昭和 33(1958) 年 9 月、信濃川橋梁のトラス 1 連を移設して改装することによって架橋された。今回調査を行った岩田橋がこれに当たる。

現在の岩田橋は 6 連のトラス橋であった信濃川橋梁の内、東端の 1 連を用い改造したもので、規模はトラス部分の長さが 20ft7in、即ち 6.2738m を 10 間つないで 62.74 m、移設に際して新設された桁橋部分は 19.10 m、全長は 81.84m、幅員が柱間で 4.50m 程とする。橋の形式は渋海川の流路部分がプラットトラスで、西岸河原部分は桁橋とする。

### 4. 長岡市不動沢 不動沢橋

旧不動沢村においては近世期、渋海川の渡川は渡船によるものであった。明治 8(1875) 年には既に架橋があったものの、これは明治 18(1885) 年の大水で流失し、同年に架橋の願いが出されている。新しい橋は同年 12 月に 169,687 円にて竣工した。明治 28(1895) 年には千歳橋と呼称される橋も建築されたと云うが、数年で流失したと言う。以後数度の流出があり、昭和 5(1930) 年の流出後、昭和 6(1931) 年になって長さ 38 間（約 69.1 m）の鉄吊橋が築かれ、昭和 28(1953) 年に架け替えがあり、更に昭和 34(1958) 年に信濃川橋梁のトラス 1 連を移設することによって架橋がなされた。今回調査を行った不動沢橋がこの橋に当たる。

不動沢橋は、6 連のトラス橋であった信濃川橋梁の内、西端の 1 連を用い、改造したものである。橋の形式はプラットトラスで、規模はトラス部分の長さは 20ft7in、即ち 6.2738m を 10 間つなぎ 62.74 m、幅員は柱間で 4.50m 程とする。

### 5. 長岡市小国町横沢 十二社

十二社は長岡市小国町横沢の字金沢に位置する。十二社は金沢の産土社で、創立年月は不詳であるが、戦前期は無格社とされ、祭神は大山祇命とする。神社は南面し旧道から東側に別れた小道に面し鳥居を構える。正面に拝殿、その奥に本殿が配置される。

拝殿は南面する入母屋造茅葺鉄板被覆の形式で、間口3間、奥行2間の規模で、背面に間口1間、奥行2間で背面に角屋の形式で幣殿が接続する。

本殿は拝殿から15尺離れた背面に位置する。一間社流造こけら葺銅板葺の形式となる。間口は6.16尺、奥行5.05尺、向拝の出は4.80尺とする。

拝殿小屋組からは安政6(1859)年の2枚組棟札が見出され、これが建築当初に関わるものと判断することができた。

本殿は小屋裏が未見で棟札などは未発見であるが、建物に洋釘用いられることなどから、明治時代中期以後の建築と判断することができる。ところで小国郷土史の記述によると十二社においては大正6(1917)年になって25坪が境内地への編入が認められている。これを本殿の建築により境内地の拡大が必要になったためのものとみれば、本殿の建築は大正時代前期と考えることもできる。なお拝殿背面では、板壁に圧痕と朱墨があり、天井は前側が格天井、背面側が鏡天井となり、鏡天井との境となる格縁には2箇所束を受けた仕口が見られるなど改造の痕跡が確認された。つまり、拝殿では当初、幣殿奥を区切って宮殿とし、祭神を祀ったと考えることができる。即ち、当初の十二社では現本殿が存在はせず、大正時代前期における本殿の建築に際して、拝殿においてこれらの改造がなされ、現在見る形式に至ったものと判断される。

## 6. 長岡市小国町小国沢 真福寺

真福寺は長岡市小国町小国沢に位置する曹洞宗の寺院で十日町市上野の長安寺末である。寺はもともと小栗山村にあり小国山法光寺と呼ばれる真言宗寺院で、住職はかつて新浮海神社別当を兼ねた。寺院は永正2(1505)年に曹洞宗へ改宗の上、長安寺の3世貫室舜理により小字神屋敷に開かれたものの、元禄8(1895)年に火災に遭い、翌年、現在地へ移り再建が行われたとされている。

### ・本堂

本堂は入母屋造金属板葺の形式で正面13間半、奥行9間半の規模で、平面形式は前後に4室を横に並べる八ッ間取を基本とするものである。

本堂は、前述のように元禄8(1695)年に火災に遭って焼失後、翌元禄9(1696)年になって現在地において再建が行われたと伝承されるが、これを示す1次資料を確認することはできなかった。

建物を見ると、確かに各部屋境に細かく柱を配することから、年代を遡るものとは考えられるが、虹梁などに施された彫刻絵様は伝承の年代よりもやや下の印象を受けた。具体的な建築年代を示すことはできないが、寺の伝承は建物の建築を始めた時期と考え、彫刻絵様などを根拠とすれば現在の本堂は18世紀前期頃の建築とするのが妥当であろう。

### ・山門

西面する山門は正面3間、奥行2間の規模で、三間一戸八脚門、切妻造銅板葺の形式となる。門は中央に通路を設けるが扉は装置されない。そして、通路両脇に木喰上人による阿吽の二王像を安置する。

山門の建築年代は明らかではないが、彫刻絵様から19世紀初期頃の建築と判断できる。門に安置される木喰上人による二王像は文化元(1804)年4月、5月の制作である。恐らく山門はこれらに前後する時期に建築がなされたとするのが妥当であろう。また、基壇側面の切石に昭和9(1934)年9月の山門改修刻銘があり、大工棟梁小栗山中澤角次郎、石工棟梁柏崎小川由廣とある。また、山門の小屋裏からは、昭和37(1962)年の棟札が見出された。“真福寺山門 旧来の茅葺破損の為改造しレジノ板張とす”として“設計者富山県 蜷川嘉七”“棟梁 三島郡越路町神谷高橋幸吉”との記載が確認された。

### ・経蔵

経蔵は正面2間、奥行2間、切妻造妻入銅板葺で南面する。平面は蔵前を持たず内部が1室で、背面及び両側面に渡りコの字型に棚を配する。

経蔵の建築年代は明らかではないが、建物では和釘の使用が確認された。また、内部には和釘止とする“寄附単”2枚が掲げられており、いずれも“両”を単位とする寄附が記載されているため、建物は幕末期頃の建築と判断することができる。

### ・観音堂

観音堂は正面3間、側面3間で、切妻造平入、金属板葺の形式となる。建物は西面し、正面に向拝を設け、外陣、内陣の形式とする。

堂の建築は従来は明治41(1908)年とされていた。ところが今回の建築調査により、小屋裏の棟東西面に明治40(1907)年8月に建築落成とする棟札が洋釘止めされることが確認された。なお、この札によれば“大工長谷川太之吉 保坂善吉”とされる。



旧越路橋 南より



岩田橋 南より



北越鉄道浦鉄橋銘板



不動沢橋 北東より



十二社 本殿 拝殿 南西より



真福寺 本堂 西より※

※は田村収撮影



真福寺 境内入口 西より



真福寺 山門 西より※



真福寺 経蔵 南東より※



真福寺 観音堂 南西より※

受託事業名：

## 小千谷市歴史的建造物調査業務

発注者：小千谷市

受託期間：平成 26 年 11 月 4 日～平成 27 年 3 月 13 日

プロジェクト主査：平山育男（建築・環境デザイン学科 教授）

プロジェクトメンバー：西澤哉子

※所属等はプロジェクト当時のもの

### 1. はじめに

平成 26(2014) 年度における小千谷市からの建造物調査業務は、小千谷市元町に位置する割烹東忠、真人に位置するおっこの木の建物について国登録有形文化財書類の作成するものと、小千谷市片貝町に所在する忍字亭主屋の建物についての調査であった。

既に、割烹東忠及びおっこの木については建築の概要を前年度までに報告しているため、本年度の報告では、建築調査を平成 26(2014) 年 11 月に実施した忍字亭主屋について、調査の結果に基づき、建築年代、平面の復原などについての考察を報告するものである。

### 2. 佐藤家と忍字亭の概要

佐藤家の当主は代々佐平治を名乗っており、江戸時代以来、片貝町における村役を務めた。生業としては酒造業を寛文・延宝(1661～1680)年間頃に創業したと考えられているが、佐藤家における醸造の確実な資料は元禄 14(1701) 年以後である。片貝における佐藤家の醸造量は他を圧倒するもので、薬酒「粟守」の製造も手掛け、出店が江戸にも設けられたという。また、佐藤家は篤志家としても古くから近郷に知れ渡っており、寛文 8(1668) 年の飢饉においての善行が記録されて以来、延享 2,3(1745,6) 年、天明(1781～89)、天保(1830～44) 年間の飢饉においても施行を行っている。

特に天明(1781～89) 年間に於ける飢饉に際して行なった、秋山郷に対する善行によって佐藤家は苗字帯刀を許されるようになっていく。当主はこれ以後、佐藤佐平治を名乗ることとなり、天明(1781～89) 年間の当主は「忍」を銘として、この文字を記した書も多く周辺の社寺を中心に残している。

佐藤家の住宅を“忍字亭”と称するのも、この「忍」の字に由来するものである。

なお、この佐藤家住宅忍字亭は小千谷市に寄贈されて、平成 10(1998) 年 10 月から市民の活用に広く供されている。

### 3. 忍字亭の概要

#### ・配置と形式、規模

忍字亭は、片貝町を南北に貫く県道 236 号線に対して、敷地の北と西側を接し西面する。敷地は南北 60m、南北 100m 程と広大なもので、敷地東側に片貝保育園が位置す

る。公道に面しては塀を構え西面に門を開いている。現在、敷地の中央に主屋である忍字亭が配されるのみであるが、かつては敷地内に醸造蔵などが複数棟置かれ、周囲には分家も多数居住するという。

敷地中央付近に配される忍字亭主屋は東面する形式であり、建物の規模は桁行が 10 間半、梁行が 6 間程度の規模となり、形式としては木造一部二階建、寄棟造の棧瓦葺となる。

#### ・平面

主屋の玄関は建物西面南寄りに設けられる。間口 2 間を有するもので、奥行半間の土間に板敷があり、6 帖の寄付となる。但し、現在一般の入館は南面の通用口からで、建物南端に間口 1 間で土間があり、ここに入口、便所が設けられている。通用口を入ると 6 帖程の広さとなる板敷があり、この南が便所、東に台所と階段、北側が 8 帖の管理人室となる。なお、階段と台所間の廊下を鍵の手に進むと建物南側の廊下へ続く。1 階は表側に 3 室、裏側に 2 室の居室を配するものである。表となる東面に上手から 8 帖、4 帖の仏間、中廊下を挟んで既述の 8 帖管理人室となり、廊下が東面と北面に廻る。中廊下の奥が続き座敷で、北側が 6 帖、南側が 8 帖となるが、8 帖は玄関上手に位置し、外からの入室も可能である。

2 階は、階段が L 字型に回り込んで東側に配された廊下で南端に達する。2 階も廊下は東面と北面に回り込んで配され、居室は 8 帖 3 室の続き座敷となる。各部屋では奥となる西側半間を上手 2 室は床・棚、下手の 1 室は押入とする。また、下手の 8 帖南側の引違戸奥には前室付の書庫が設けられている。

なお、小屋組などの構造は未見である。

### 4. 忍字亭の建築年代と復原考察

#### ・建築年代

主屋の建築年代を示す 1 次資料を建築調査において見出すことはできなかった。

但し、建物を見ると 1 階の東側の居室部分 3 室が特に古いようで、和釘の使用も随所に認められたことから、建物は少なくとも明治時代中期以前の建築であり、柱などの風蝕の具合からは江戸時代末期頃の建築と判断することができた。

#### ・主屋の増築

一方、建物には、以下に示す 12 行の墨書銘を有するス

ギ材の木札が残されていたという。

此工ヲ以テ居宅補修工事

完了ス

家運万年ノ隆ヲ祈念ス

大正八己未年八月

新築

模牧ヶ花解良家

小座敷脇床図様

杉材烏森産

大工

安達利三郎

此年世界大戦終結

ママ  
講話成立万人歓喜

資料は写真による確認に留まるが、順に内容を検討してみたい。

先ず、木札4行目の記載は大正8(1919)年にこの建物に対して何らかの工事が行われ、その終了を示すものと判断できる。文中において工事の内容は1行目に“補修工事”、5行目に“新築”と異なる表記がなされるが、既に述べたように、主屋建物自体の創建が江戸時代末に遡ることを考慮すると、工事においては、補修に加えて増築（新築）がなされたと考えるのが文面上は妥当と言えるであろう。

6行目の“牧ヶ花解良家”とは現在の燕市、旧分水町牧ヶ花において、江戸時代中期以後、代々庄屋職を勤めた解良家であり、文面からは、この小座敷床脇の図柄に同家のものを模したとできよう。この工事を手掛けた大工は安達利三郎となる。

なお、増築前の建物は明治22(1889)年に刊行された『北越商工便覧』に掲載される。この図版を確認すると、佐藤家の主屋建物はこの時点においては平屋で茅葺であったと考えることができる。

即ち、記録に残る大正8(1919)年の工事においては、この茅葺平屋の建物に改造、増築を加えたと考えるのが妥当であろう。

#### ・部屋名

各部屋に用いられる建具を中心に部屋名の記載を確認することができた。

1階上手8帖は昭和9(1934)年の銘とともに“藤ノ間”、続きの4帖が“仏間”、背面上手が昭和27(1952)年の銘とともに“西座敷”、下手が“西座敷八畳”、玄関寄付は“玄

関”とされた。

2階では上手から“奥ノ間”、“次ノ間”“東之間”と確認された。

#### ・復原

建物を見ると、既に述べたように1階表側3室の柱や天井の仕様が他に較べ古いものと見ることができた。それ以外の部分は時代が下り、ここから和釘の仕事を見ることはできなかった。また、表側3室周辺にはいくつかの痕跡も確認されるものの、天井材などかなり古い時代のもので残されていることなどを考慮すると、建物の変遷は以下のように考えることができよう。

先ず、江戸時代末に1階3室を中心とする部分が建築を受け、木札の残る大正8(1919)年の建築では、これらの建物を補修、増築する形で、1階背面の座敷、2階の建築がなされたものと判断される。なお、1階4帖は部屋名より、大正8(1919)年以後は仏間として使われていたものと考えることができる。

なお、昭和50(1975)年の寄贈前における建物の姿を空中写真で確認すると、主屋では東面北端と南端から東向きに2階建と考えことのできる角屋が接続しており、建物全体としては逆コの字形の平面を呈しており、それぞれの角屋には更に別棟の建物がつながっていたことが確認できる。

## 5. さいごに

小千谷市片貝町に位置する忍字亭について建築調査を実施し、建築年代などについて考察を行ってきたが、明らかとなるのは以下の諸点である。

現存する忍字亭主屋は江戸時代末頃の建築と考えることができ、明治時代中期頃における忍字亭の姿は、『北越商工便覧』に描かれる平屋建茅葺の形式と考えることができる。

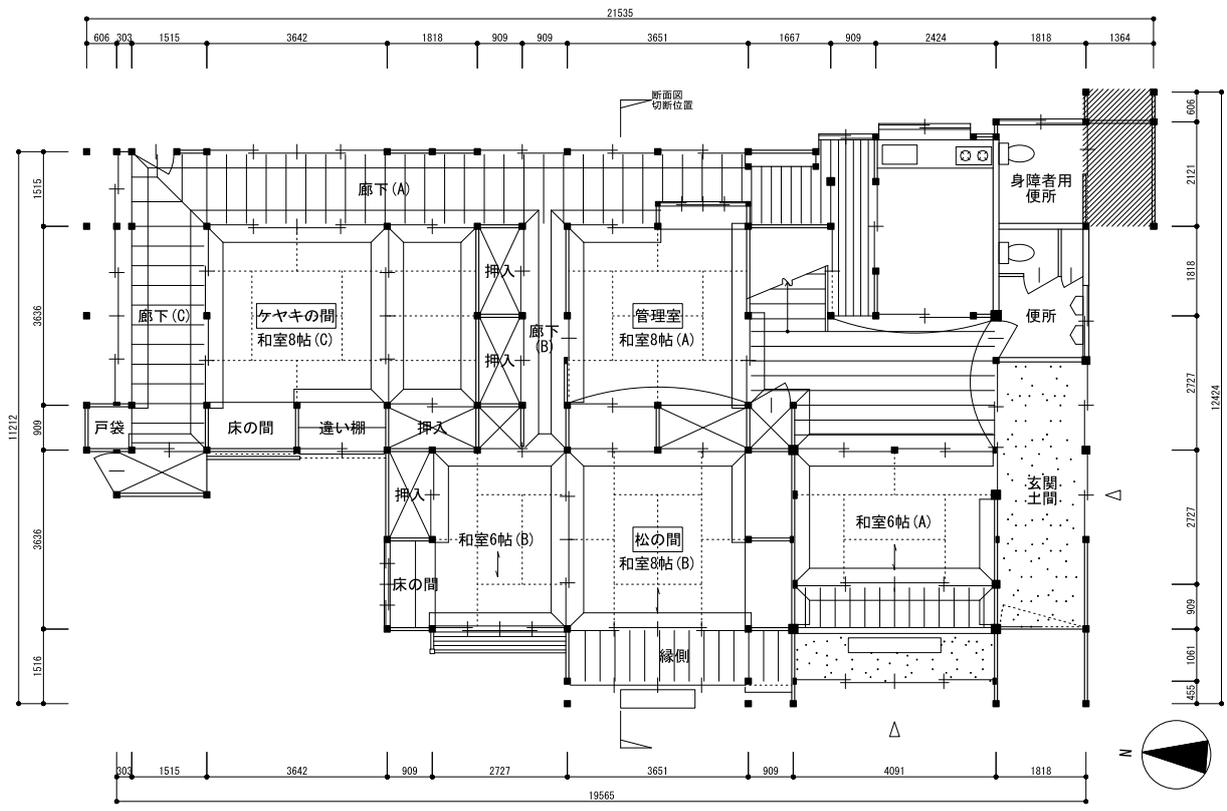
そして、この建物に対し、大正8(1919)年に補修・増築のあったことが木札の記載から明らかであるが、この際、当初の建物を2階建に増築し、背面にも座敷を構える現在の構成になったと考えることができる。

なお、主屋の建物は以後も増改築が繰り返され、昭和50(1975)年頃、忍字亭主屋は全体的に逆コの字形の平面形式であったことが空中写真から判明する。

建物は現在、公共の使用に供されるが、今後とも手厚い保護が望まれる。



主屋 西より





主屋 2階 北東より



主屋 1階 8帖とブツマ 東より



主屋 1階 背面の6帖 南より



『北越商工便覧』（国会図書館蔵本）に掲載される佐藤佐平治家住宅



## デザイン研究開発について

長岡造形大学は平成 26 年度より公立大学法人となりました。前身であるデザイン研究開発センターでの受託研究プロジェクトはデザイン制作と調査、コンサルティングが中心でした。平成 26 年度以降は公立大学法人の社会連携と知的財産取り扱いの考え方に基づいて、今後のデザイン研究開発について整理していきます。

### クライアントの依頼目的と依頼内容

クライアントの目的は営利と非営利に分けられます。

営利目的には

- ・ 調査・研究
- ・ 事業アイデア発想
- ・ 商品企画・開発
- ・ 事業実施
- ・ 検証、等

非営利（公益）目的には

- ・ 調査研究
- ・ コンサルティング
- ・ まちづくり、地域づくり、メセナ活動、等

依頼内容には

- ・ 調査・アンケート
- ・ 実験、分析
- ・ 文化財調査
- ・ コンセプト提案
- ・ 商品企画
- ・ 商品デザイン制作、試作
- ・ イベントプロデュース
- ・ 広報物デザイン制作
- ・ 広報用作品提供

等が考えられます。これらの目的と依頼内容の種別をもとに学内調整を図り対応体制を提案していきます。

### 想定されるクライアント

- ・ 国・自治体
- ・ 公益法人
- ・ 企業
- ・ 任意団体
- ・ 個人 など

### 社会連携形態の調整

社会連携依頼の内容に対応して以下の種別や連携形態が考えられます。

1. 教育（連携形態：アクティブラーニング、インターンシップ）
2. 研究（連携形態：共同研究、受託調査研究）
3. 収益事業（連携形態：請負業務、大学知財利用許諾、学生知財利用許諾）
4. 紹介（連携形態：コンペ公募告知、アルバイト・ボランティア募集告知）

デザイン研究開発に関する相談は地域協創センターが一括窓口となっています。センターでは、依頼・相談内容に応じて上記のような整理のもとに連携形態を学内調整していきます。

# プロジェクト 担当教員



プロダクト  
デザイン  
学科

鈴木 均治 Kinji Suzuki  
専門分野/テキスタイルデザイン (模様染)  
現在の研究課題/型紙捺染におけるマチエールの研究  
最終学歴 + 資格/東京造形大学造形学部デザイン学科

教授



視覚  
デザイン  
学科

阿部 充夫 Mitsuo Abe  
専門分野/写真  
現在の研究課題/写真を使用した画像表現  
最終学歴 + 資格/東京写真専門学校商業写真科

教授



視覚  
デザイン  
学科

山本 敦 Atsushi Yamamoto  
専門分野/グラフィックデザイン、広告全般、ブランディング  
現在の研究課題/地域資源を活用したブランディングデザインの可能性の探究  
最終学歴 + 資格/専門学校桑沢デザイン研究所グラフィックデザインII科

教授



プロダクト  
デザイン  
学科長

土田 知也 Tomoya Tsuchida  
専門分野/プロダクトデザイン  
現在の研究課題/プロダクトデザイン全般  
最終学歴 + 資格/千葉大学大学院工学研究科修士課程 (工学修士)

教授



視覚  
デザイン  
学科

天野 誠 Makoto Amano  
専門分野/グラフィックデザイン (エディトリアルデザイン)  
現在の研究課題/エディトリアルデザイン  
最終学歴 + 資格/専門学校桑沢デザイン研究所グラフィックデザイン研究科

教授



視覚  
デザイン  
学科

ヨールグ ビューラ Jörg Bühler  
専門分野/映像、マルチメディア、アート教育  
現在の研究課題/1 映像・動画、コンピュータ関係のアート 2 情報を伝えるためのビジュアル表現、特に地図、科学、日常のための記号学  
最終学歴 + 資格/パーセル美術学校芸術教育専攻 (スイス)、高等芸術教員免許取得

教授



学長

和田 裕 Hiromu Wada  
専門分野/トランスポーターデザイン  
現在の研究課題/トランスポーターデザイン、造形のセオリー、エスキースによる創造能力の向上  
最終学歴 + 資格/東海大学教養学部芸術学科

教授



プロダクト  
デザイン  
学科

増田 譲 Yuzuru Masuda  
専門分野/プロダクトデザイン  
現在の研究課題/3DCAD 3Dプリンターを活用したパーソナル・ファブリケーション、新しい3D入力デバイスの研究  
最終学歴 + 資格/多摩美術大学デザイン科立体デザイン専攻プロダクト専修卒業、慶應義塾大学政策・メディア研究科XDプログラム後期博士課程在学中

教授



視覚  
デザイン  
学科

学務部長  
図書館長  
教授

長瀬 公彦 Kimihiko Nagase  
専門分野/グラフィックデザイン、イラストレーション  
現在の研究課題/視覚表現の可能性の探究  
最終学歴 + 資格/東京藝術大学美術学部デザイン科、School of VISUAL ARTS, Fine Arts (NewYork)

教授



視覚  
デザイン  
学科

池田 光宏 Mitsuhiro Ikeda  
専門分野/ビジュアルアート、コミュニケーションデザイン  
現在の研究課題/パブリックスペースにおけるアートプロジェクト  
最終学歴 + 資格/東京藝術大学大学院美術研究科デザイン専攻

准教授



プロダクト  
デザイン  
学科

菊池 加代子 Kayoko Kikuchi  
専門分野/テキスタイルデザイン (織)  
現在の研究課題/ダマスク織機を用いた作品制作、Mariano Fortuny デルフオストレス復元研究、「長岡造形大学草木染色図鑑」作成  
最終学歴 + 資格/多摩美術大学デザイン科染織デザイン専攻織専修

教授



プロダクト  
デザイン  
学科

森田 守 Mamoru Morita  
専門分野/知的財産権制度の内、意匠法  
現在の研究課題/大学教育における知的財産・デザイン保全  
最終学歴 + 資格/東海大学教養学部芸術学科、弁理士法第7条に規定する弁理士登録資格

研究推進部長  
教授



視覚  
デザイン  
学科

入試部長  
教授

長谷川 博紀 Hiroki Hasegawa  
専門分野/グラフィックデザイン、広告全般、イラストレーション  
現在の研究課題/イラストレーション  
最終学歴 + 資格/東京藝術大学美術学部デザイン科

教授



視覚  
デザイン  
学科

吉川 賢一郎 Kenichiro Kikkawa  
専門分野/グラフィックデザイン  
現在の研究課題/コミュニケーションデザインにおける機能美と形態美の探究、本質を見極めたビジュアルアイデアの発想と表現について、地域の伝統的な祭りにおける紙と絵具で作られた立体物の素材と制作の研究  
最終学歴 + 資格/多摩美術大学美術学部デザイン科グラフィックデザイン専攻

准教授



プロダクト  
デザイン  
学科

齋藤 和彦 Kazuhiko Saito  
専門分野/インダストリアルデザイン  
現在の研究課題/パーソナルトランスポーターとその造形表現手法  
最終学歴 + 資格/武蔵野美術大学造形学部工芸工業デザイン学科

教授



プロダクト  
デザイン  
学科

金澤 孝和 Takakazu Kanazawa  
専門分野/プロダクトデザイン (家具・生活小物)  
現在の研究課題/必然から導かれるデザインの在り方について 小規模伝統的産地の活路を開くために最適な支援システムの構築  
最終学歴 + 資格/東京造形大学造形学部デザイン学科

准教授



視覚  
デザイン  
学科

アンドリュ・バン・ゴサム Andrew Van Goethem  
専門分野/ TESOL - Teaching English to Speakers of Other Languages  
現在の研究課題/ Fossilization: "Empty Categories" Assisting, Larry Selinker (England) Sociolinguistics and Language Teaching Observation and Discourse Analysis  
最終学歴 + 資格/ Masters Degree: TESOL, Temple University, Tokyo, Japan 1998 B.S.Degree: University of Wisconsin Stevens Point, 1983

教授



視覚  
デザイン  
学科

真壁 友 Tomo Makabe  
専門分野/メディアアート、デジタルファブリケーション  
現在の研究課題/デジタル機器を活用した素材の加工及び、それを使った表現  
最終学歴 + 資格/東北学院大学大学院工学研究科応用物理学専攻 (工学修士)

准教授



プロダクト  
デザイン  
学科

境野 広志 Hiroshi Sakaino  
専門分野/プロダクトデザイン  
現在の研究課題/機器操作に関する認知的研究  
最終学歴 + 資格/千葉大学大学院工学研究科修士課程 (工学修士)

教授



プロダクト  
デザイン  
学科

川越 ゆかり Yukari Kawagoe  
専門分野/服飾・衣装デザイン・製作  
現在の研究課題/持続的コミュニケーションツールとしてのファッション  
最終学歴 + 資格/文化服装学院服飾専門課程服装科

准教授



視覚  
デザイン  
学科長

松本 明彦 Akihiko Matsumoto  
専門分野/写真  
現在の研究課題/写真を用いたアート表現  
最終学歴 + 資格/武蔵野美術大学造形学部基礎デザイン学科、慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科後期博士課程在学中

教授



視覚  
デザイン  
学科

御法川 哲郎 Tetsuro Minorikawa  
専門分野/イラストレーション  
現在の研究課題/イラストレーションによるビジュアルコミュニケーション  
最終学歴 + 資格/多摩美術大学美術学部グラフィックデザイン学科

准教授



視覚  
デザイン  
学科

准教授

**山田 博行** Hiroyuki Yamada  
専門分野 / 写真, 映像  
現在の研究課題 / 写真的アプローチの映像表現の探求  
最終学歴 + 資格 / 武蔵野美術大学造形学部映像学科



美術・工芸  
学科

学部長  
研究科長  
教授

**馬場 省吾** Shogo Baba  
専門分野 / 金属工芸 (鍍金造形)  
現在の研究課題 / 鍍金・鋳造技法による素材と造形, 表現の展開及び応用  
最終学歴 + 資格 / 東京藝術大学大学院美術研究科鍍金専攻修士課程 (芸術学修士)



美術・工芸  
学科長

准教授

**長谷川 克義** Katsuyoshi Hasegawa  
専門分野 / 金属工芸 (鍍金)  
現在の研究課題 / 鍍金技法による器物造形の探究及び古代鋳造技術の研究  
最終学歴 + 資格 / 東京藝術大学大学院美術研究科工芸専攻 (鍍金) 修士課程 (美術修士)



建築・環境  
デザイン  
学科

教授

**菅原 浩** Hiroshi Sugahara  
専門分野 / 表象文化論, 比較文化論, 外国語教育  
現在の研究課題 / 想像力を起点とした「意識構造+世界構造」の探究  
最終学歴 + 資格 / 東京大学大学院総合文化研究科比較文学・比較文化専攻博士課程 (学術修士)



視覚  
デザイン  
学科

助教

**金 奉洙** Bongsu Kim  
専門分野 / グラフィックデザイン, 紋章・しるし文化, 内発的発展論に基づく地域開発計画  
現在の研究課題 / 伝統的なしるし文化に基底した地域の内発的発展の探究, 燕地域金属洋食器の模様に対する調査分析  
最終学歴 + 資格 / 千葉大学大学院工学研究科デザイン科学専攻博士課程 (学術博士)



美術・工芸  
学科

教授

**結城 和廣** Kazuhiro Yuki  
専門分野 / 美術科教育, 総合学習  
現在の研究課題 / 「発想・構想・表現・鑑賞における指導過程の類型化」, 「教材開発の視点」, 「児童画を読み解く鑑賞法」  
最終学歴 + 資格 / 弘前大学教育学部, 小学校教諭一種免許, 中学校教諭美術一種免許, 高等学校教諭美術一種免許



建築・環境  
デザイン  
学科

キャリアデザイン  
センター長  
教授

**上野 裕治** Yuji Ueno  
専門分野 / ランドスケープデザイン, 生物多様性環境  
現在の研究課題 / 農村景観保全計画, 物語性のあるランドスケープデザイン  
最終学歴 + 資格 / 東京農業大学大学院農学研究科環境共生学専攻修士, 博士 (環境共生学), 技術士 (建設部門), 登録ランドスケープアーキテクト, 樹木医



建築・環境  
デザイン  
学科

教授

**平山 育男** Ikuo Hirayama  
専門分野 / 建築史, 民家史, 社寺建築, 水道史, 文化財の保存・修復  
現在の研究課題 / 建築物はどのようにして建てられてきたのか  
最終学歴 + 資格 / 早稲田大学大学院理工学研究科建設工学専攻博士課程, 博士 (工学), 博士 (造形)



美術・工芸  
学科

教授

**石原 宏** Hiroshi Ishihara  
専門分野 / 西洋美術史  
現在の研究課題 / 西洋中世美術史  
最終学歴 + 資格 / 早稲田大学大学院文学研究科芸術学専攻修士後期課程満期退学 (文学修士)



美術・工芸  
学科

准教授

**岡谷 敦魚** Atsuwo Okanoya  
専門分野 / 版画 (銅版, リトグラフ, 木版)  
現在の研究課題 / 現代版画の可能性の探究  
最終学歴 + 資格 / 武蔵野美術大学造形学部油絵学科版画コース銅版画専攻, 東京藝術大学大学院美術研究科芸術学美術教育専攻



建築・環境  
デザイン  
学科

教授

**江尻 憲泰** Norihiro Ejiri  
専門分野 / 建築構造  
現在の研究課題 / 新素材の建築構造への応用, 制震等  
最終学歴 + 資格 / 千葉大学大学院工学研究科 (工学修士), 一級建築士, 構造一級建築士, JSCA 構造士



建築・環境  
デザイン  
学科長

教授

**森 望** Nozomu Mori  
専門分野 / ディスプレイデザイン  
現在の研究課題 / 展示デザインの基礎データに関する研究  
最終学歴 + 資格 / 多摩美術大学美術学部建築科, 一級建築士



美術・工芸  
学科

教授

**遠藤 良太郎** Ryotaro Endo  
専門分野 / 絵画  
現在の研究課題 / 絵画空間の輪郭線とタッチ. 絵画性の獲得の諸条件. 藝術の役割, 社会と人間性について. 絵画論  
最終学歴 + 資格 / 東京藝術大学大学院博士課程 (後期) 美術研究科絵画専攻 (油画) 博士 (美術)



美術・工芸  
学科

准教授

**小林 花子** Hanako Kobayashi  
専門分野 / 彫刻  
現在の研究課題 / 木を基本素材とした立体表現の探究, 美術の社会へのかかわりと可能性の探究  
最終学歴 + 資格 / 愛知県立芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻修士



建築・環境  
デザイン  
学科

教授

**川口 とし子** Toshiko Kawaguchi  
専門分野 / 建築・インテリア・プロダクトのデザイン  
現在の研究課題 / 建築再生, グローバル・リージョナルな建築のあり方  
最終学歴 + 資格 / 日本大学大学院理工学研究科建築学専攻博士前期課程, 一級建築士, 管理建築士



建築・環境  
デザイン  
学科

教授

**山下 秀之** Hideyuki Yamashita  
専門分野 / 建築意匠・建築設計  
現在の研究課題 / 自然のグローバルシステムに呼応する建築のヴィジョンを, 独創的なモデルによって提示すること  
最終学歴 + 資格 / 東京工業大学大学院理工学研究科修士, 一級建築士  
<http://www.ae-lab.com/>



美術・工芸  
学科

教授

**大森 修** Osamu Omori  
専門分野 / 言語技術教育, 特別支援教育  
現在の研究課題 / 指導技術  
最終学歴 + 資格 / 新潟大学教育学部



美術・工芸  
学科

准教授

**手銭 吾郎** Goro Tezeni  
専門分野 / 金属工芸 (鍍金)  
現在の研究課題 / 金属工芸における鍍金技法及び筒紋り技法による造形表現の探求と技術の研究  
最終学歴 + 資格 / 東京藝術大学大学院美術研究科修士課程工芸専攻 (鍍金) 修士



建築・環境  
デザイン  
学科

教授

**木村 勉** Tsutomu Kimura  
専門分野 / 建造物保存修復  
現在の研究課題 / 保存修復の考え方と方法, 保存修復技術, 近代遺産の保存と活用, 歴史地区における修復・修景  
最終学歴 + 資格 / 静岡県立静岡工業高等学校建築科, 博士 (工学)



建築・環境  
デザイン  
学科

地域協創  
センター長  
教授

**渡辺 誠介** Seisuke Watanabe  
専門分野 / 都市計画, 観光まちづくり  
現在の研究課題 / JR東日本がきっかけになった長岡市根田屋地区まちづくり, 長期未着手都市計画道路に関する研究, 市街化調整区域内での農村景観に関する研究, 空き家の活用方法に関する研究  
最終学歴 + 資格 / 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻博士課程 (工学博士)



美術・工芸  
学科

教授

**菅野 靖** Yasushi Kanno  
専門分野 / 金属工芸 (彫金)  
現在の研究課題 / 金属と仲良くなること  
最終学歴 + 資格 / 東京藝術大学大学院美術研究科彫金専攻修士課程 (芸術学修士)



美術・工芸  
学科

准教授

**中村 和宏** Kazuhiro Nakamura  
専門分野 / ガラス工芸  
現在の研究課題 / サステナブル (=持続可能) な社会における, ガラス工芸素材による, 造形からの展開と可能性の探究  
最終学歴 + 資格 / 財団法人金沢沢山山工芸工房工務技術研修員



建築・環境  
デザイン  
学科

教授

**後藤 哲男** Tetsuo Goto  
専門分野 / 建築・都市設計  
現在の研究課題 / 木構造における空間の設計方法に関する研究と実践, バリ都市建設における空間の設計方法に関する研究  
最終学歴 + 資格 / 東京大学工学部都市工学科, 同大学院修士 (工学博士), バリ, エコール・デ・ボザル第6分校卒業, フランス政府公認建築家 (Architecte D.P.L.G), 一級建築士



建築・環境  
デザイン  
学科

地域協創センター  
副センター長  
准教授

**澤田 雅浩** Masahiro Sawada  
専門分野 / 都市計画, 地区防災  
現在の研究課題 / 流動性と多様性に着目した地域計画策定手法  
最終学歴 + 資格 / 慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科後期博士課程, 博士 (政策・メディア)

## デザイン研究開発の相談について

### ① 相談の受付

地域協創センターにて電話等で  
随時受け付けています。

電話 0258-21-3321

Eメール chiiki@nagaoka-id.ac.jp

### ② 内部協議～両者打ち合わせ

頂いた相談内容をセンターで把握し、打合せにて  
詳細内容を再度お伺いいたします。

その後、ご相談内容に沿った最も適切な方策をご  
提案いたします。

デザイン研究開発として教員が業務にあたる場合は、民間企業では業務の遂行が難しいと思われる業務を対象としています。以下がその内容となります。

- ① デザイン、設計、企画等に対するコンサルタント
- ② 技術者に対する高度技術の教育及び研修
- ③ 学術情報の提供（調査含む）
- ④ 共同研究・共同開発

なお、民間企業の業務を阻害するデザイン・設計作業（完成品の納品）はデザイン研究開発の対象外としますが、業務の専門性が高く、県内企業では対応できないと思われるものは相談・対応を検討します。

また自治体、NPO 法人、各種団体などからの非営利での依頼についてはデザイン・設計等も含め相談に応じます。

※その他、学生を交えた研究等を希望される場合は、大学が教育効果が高いと判断した場合に授業として教員と学生がプロジェクトに関わることもあります。

### ③ 主査の決定～業務委託契約

ご相談内容に応じて本学教員の中から適任者（主査）を決定します。業務の方法、期間、予算等について、両者で協議を重ね、業務委託契約を締結し、業務がスタートします。ただし、授業その他の学事が優先されますのでご了承ください。

※両者打ち合わせから契約・業務開始までに最低でも1ヶ月程度かかります。余裕をもってご相談ください。

### ④ 成果物等の提出・業務終了

成果物等を提出し、委託元の検収後、業務終了となります。

平成 26 年度

長岡造形大学デザイン研究開発

発行日：平成 27 年 8 月 31 日

発行：長岡造形大学地域協創センター

940-2088 新潟県長岡市千秋 4 丁目 197 番地

Tel. 0258-21-3321 Fax. 0258-21-3343

URL <http://www.nagaoka-id.ac.jp/>

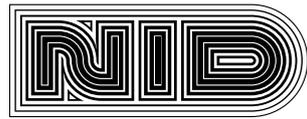
E-mail [chiiki@nagaoka-id.ac.jp](mailto:chiiki@nagaoka-id.ac.jp)

本書の図版及び文章の無断転載を禁じます。

©2015 Nagaoka Institute of Design

長岡造形大学デザイン研究開発のこれまでの活動報告については

上記 URL からご覧いただけます。



公立大学法人

**長岡造形大学**

Nagaoka Institute of Design